ヤマノイモの青かび病を防除する種芋消毒方法

【背景・目的・成】　兵庫県の特産物であるヤマノイモにおいて、2003年ごろから貯蔵中の種芋が青かび病により腐敗したり，定植後の種芋が腐敗して萌芽（ほうが）しないことがあり，問題となっていました。そこで，種芋消毒用の殺菌剤の効果と消毒後定植までの適切な種芋の保存方法・期間について検討しました。
その結果、新規登録された殺菌剤ベルクートフロアブルの種芋消毒効果が高く、萌芽率の向上と増収に結びつくことを明らかにしました。さらに、ベルクートで消毒後、種芋を保湿条件で保存し、速やかに定植するのが望ましく、遅くても消毒後13日以内に定植することが、増収に結びつくことを明らかにしました。

1　種芋消毒用殺菌剤の効果比較

切断した種芋に青かび病菌を噴霧した後、薬剤浸漬または消石灰粉衣しました。その後、芋切片をポリ袋（保湿条件）に入れ、室温（約17 ℃）で9日間保存した後、定植しました。

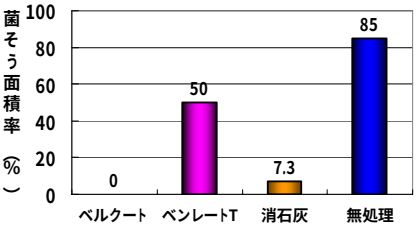

図1　殺菌剤等の種芋消毒効果
（種芋での青かび病菌発生程度）

ベルクート

無処理（かびが生えています）

ベルクートで消毒すると発病がなく、高い殺菌効果が認められます。

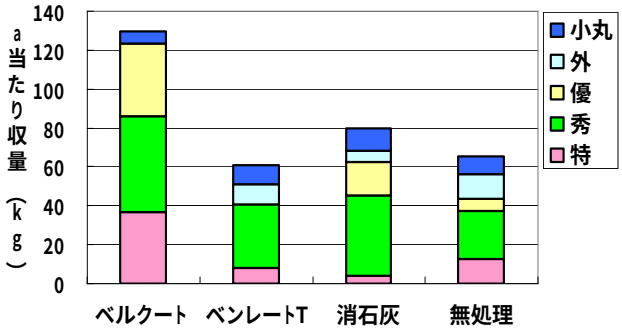

図2　種芋消毒方法と収量

ベルクートで消毒すると収量も多くなります。

2　消毒後、定植までの種芋保存方法・期間が萌芽率・収量に及ぼす影響

切断種芋に青かび病菌を噴霧した後、ベルクートフロアブルに浸漬し、芋切片をポリ袋内（保湿条件）・室温で5、9、13日間保存、またはコンテナ（乾燥条件）に入れ、室温で5日間保存後、定植しました。

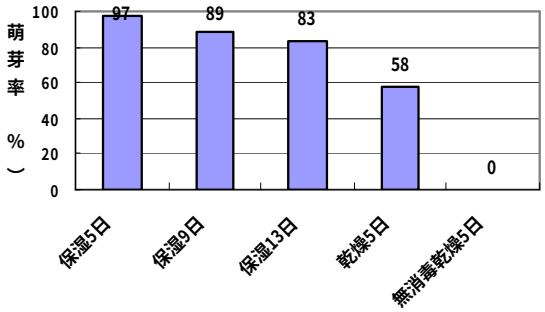

図3　種芋消毒後の保存方法と定植後の萌芽率
（6月19日調査）

保湿して保存した場合、萌芽率は5日で97%と最も高く、初期生育が良好ですが、芋を乾燥させて保存すると、5日でも58%と低く、生育が遅延します。

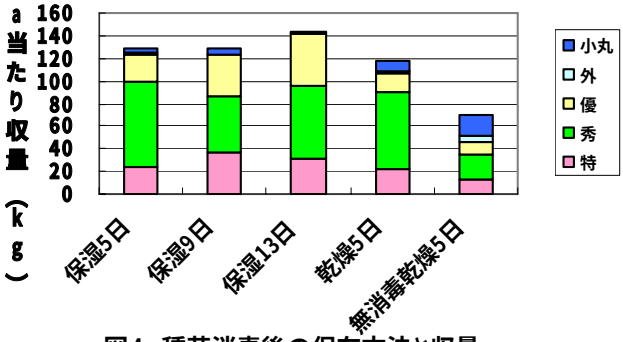

図4　種芋消毒後の保存方法と収量

保湿して保存すると、保存期間が5、9、13日とも収量は130 kg/a前後と多いですが、乾燥条件では5日保存の場合でも118 kg/aとやや減少します。

有効な消毒方法

ベルクートフロアブルで種芋消毒→ポリ袋など（保湿条件）で保存→速やかに定植（遅くても消毒後13日以内に）

【技術の活用】　種芋を保湿して貯蔵すると青かび病にかかりにくいので、本技術と種芋の保湿貯蔵を併用することが望ましいです。

兵庫県立農林水産技術総合センター　北部農業技術センター　農業部